番外編その１　　菊川凱夫物語

夢を追いかけた二人の『大きな人間たちの詩』

この物語は、執筆当時（1995 年５月）Ｊリーグ２部に所属しております、アビスパ福岡の元総監督・菊川凱夫氏（2022 年 12 月 2 日逝去、享年 78）の実話です。私の長男が幼稚園の年長の時、（株）中央防犯が開きましたサッカースクール「ランカーフットボールクラブ」にお世話になりましたことをきっかけに、以来当時 10 数年に渡って、中央防犯ＳＣ～藤枝ブルックス～福岡ブルックス～アビスパ福岡を応援してきました私が、1995 年５月、菊川氏の個人後援会「ＫＩＣＫ　ＯＦＦ」からの依頼を受け、書きましたものです（末尾に表記しました通り、その後加筆・修正致しました)。拙い文章ですが、宜しくお付き合い下さいませ。

なお、この物語は、アット・ニフティのサッカーフォーラム、ＦＳＪＬ ＭＥＳ１８アビスパ福岡会議室(運営する富士通から依頼を受け、私、ヒゲグマと福岡市在住の ZENZEN さんが、この部屋のボードリーダーを務めさせて頂きました。現在は閉鎖)、#1234 から始まる発言にも掲載致しました。

菊川凱夫アビスパ福岡テクニカルスーパーバイザー（1995 年当時）は、1944 年 9 月 12 日その昔、天皇杯全日本サッカー選手権大会決勝大会をも開催し、”サッカーの街”として全国にその名を轟かした静岡県藤枝市に、合名会社菊川商店の長男として産まれました。幼い頃、サッカー観戦の好きな父・隆介氏は、家の近くにあり、過去数種の全国大会で優勝 9 回、準優勝 3 回を果たした古豪・藤枝東高校サッカー部の練習や試合を見に、子守がてら凱夫少年を連れ、毎日のように藤枝東高校に足を運んでおりました。

そんな父とは反対に、なかなかサッカーに興味を示さなかった凱夫少年でしたが、ある日、手を骨折しながらも泥まみれになりながら、ボールを追っている東高校の選手の 1 人の姿に感動し、サッカーを始めたのです。それが藤枝中学 1 年生のときでした。この時から天性の才能は芽吹きはじめ、ＦＷからＦＢ（Full Back）まで全てのポジションを難なくこなし、将来の日本代表の片鱗をも表し始めました。そして、当時から進学校としても名高い、憧れの藤枝東高校に、1 年浪人してまでも挑戦、61 年に入学を果たしました。藤枝東高校では、2 年と 3 年時にあの藤色のユニホームで、全国高校サッカー選手権大会を制覇し、東高黄金時代の一翼を担い、早くも全日本代表の呼び声がちらほら囁かれるようになりました。

そうした活躍から当然のごとく藤枝東高校 3 年生の後半になりますと、サッカーでは名高い各大学が菊川氏獲得に乗り出して来ました。当時大学サッカーでは中央大学が有名で、全日本代表選手の多くが中央大学出身で、藤枝東高 1 年先輩の元五輪代表、元全日本監督の山口芳忠氏も中央大学に進学しており、当然のごとく菊さん(当時の呼び名で失礼します)の元にも中央大学からの誘いが来ておりました。しかしながら、その頃、早くから菊さんの才

能に注目しておりました明治大学のＯＢ・Ｏ氏が毎日のごとく菊さんの元にはせ参じ、午前中は菊さんのお父さんが経営する会社に、午後は藤枝東高校のサッカー部の練習見学にと、熱心に通い続けて来られました。そして、ある時遂にそのＯ氏に、同輩の神戸氏と共に食事に誘われ、”天丼”をご馳走になりながら、強く明治大学入りを要請されたとのことです。「ボクは、その”天丼”に釣られたんですよ。」と菊さん。そんなことがあった後のある日、いよいよ藤枝東高校サッカー部後援会役員で、同校の大先輩の某氏に呼ばれ、「アジアユース大会に日本代表で出たいんだったら、中央大学に行け。」と言われ、即座に「私は、明治大学に行きます！」と断ってしまった菊さん。「ボクあ、確かにアジアユースに日本代表として出たかったですよ。当時は我々の夢でしたからね。しかし、だからと言って中央大学に行きたくはなかったんですよ。自分の信念としてね。（日本代表は）自分の手で勝ち取りたかったんですよ。」結果的には、”天丼に目がくらみ”、大先輩の進言までも断ってしまった菊さんの人間性のにじみ出た話ですね。

明治大学では、先輩に杉山隆一・ジュビロ磐田顧問（執筆当時、元同スーパーバイザー）がおり、以後菊さんにとって、”生涯の師”を得たのでした。このお二人の活躍で、明治大学は中央大学を破り、大学リーグ戦で優勝を果たしました。そして、菊さんは 68 年、隆さん（こちらも当時の呼び名で失礼します）のいる三菱重工（現浦和レッドダイヤモンズ）に入社、あくまでもハードで、しかしハートのある名サイドバックとしてファンを魅了しました。69 年と 73 年に日本リーグ優勝、71 年と 73 年には天皇杯をも制覇したのです。さらに、同時に隆さんらと全日本代表としても活躍し、アジア大会、ムルデカ大会など数々の国際試合でもその存在を見せつけました。しかしこの間、華やかな活躍の裏で膝に過度の負担を強いり、このまま選手生活を続ければ、好きなサッカーどころか、スポーツすらできなくなると診断され、30 歳を前にしてやむなく現役引退を決意したのでした。

父・隆介氏と、30 歳になったら家業を継ぐとの約束もあり、その歳の 1975 年、菊さんは 7 年間お世話になった三菱重工を退社し、故郷・藤枝に戻って来たのです。当時、日本リーグ(JSL)を引退した選手は、以後 1 年間は下位リーグの試合に出場できないという規則があり、菊さんはその年、家業引継の勉強方々、サッカーに明け暮れた生活から一転し、産まれて始めてのんびりと自分自身を見つめ、自分を育ててくれた藤枝のサッカーを眺めることができたのです。翌 76 年、試合出場停止が解けるや否や、菊さんは膝に爆弾を抱えながらも、やはりサッカーの夢は捨てきれず、当時、静岡県社会人サッカーリーグ 1 部に所属していた名門「志太クラブ」に入部、以後 8 年間、同クラブに在籍したのです。1947 年に県立志太中学校（現藤枝東高校）の生徒及び卒業生で結成された同クラブは、京都紫郊クラブ（のち京都紫光クラブ、現京都パープルサンガ）に継ぐ伝統を持つクラブで、同年第 2 回石川県国体参加を皮切りに、幾多の国体、あるいは天皇杯全日本大会や、全日本実業団大会に出場し、輝かしい実績を残していたのです。特に 57 年に藤枝市で行われた第 12 回静岡県国体では、藤枝東高校と共にダブル優勝を果たし、「サッカーの街・藤枝」の名を全国に轟かす、その一翼を担ったのです。80 年には同クラブのプレーニングマネジャーを引き受けた菊さ

んは、輝かしい歴史を持ちながらも資金難あえぐ同クラブの現状を目の当たりにし、加えて74 年正月の全国高校選手権大会準優勝を最後に、久しく新聞にその名を見せない藤枝東高校の低迷を見続けながら、現在ある自分を育ててくれたこの藤枝のサッカーを何とかしたいと、煩悶する日々が始まったのです。

そうした矢先、82 年に社員の同好会として創部した「中央防犯サッカー部」が翌 83 年には、加盟したばかりの静岡県社会人サッカーリーグ中西部 3 部で、8 勝 1 敗でいきなり優勝を果たしてしまったのです。この優勝には富澤静雄・㈱中央防犯社長（当時）は大変な喜びようで、この時、優勝を果たした選手達を前にして、「よくやってくれた。おめでとう！このお祝いに君たちになにか一つあげたいが、何がほしい？」と聞いたのです。いきなりの社長のその言葉に、暫し躊躇した選手達は、お互いの顔を見合わせた後、なんと口を揃えて「監督です！」と、きっぱり答えたそうなんです。この余りに純粋な選手達の答えに打たれた富さん（こちらも当時の呼び名で失礼します）は、「そうか、分かった。それじゃ、おまえ達に日本で 1 番の監督を連れてきてやる。」と約束したのです。こうして菊川凱夫・中央防犯サッカー部監督が誕生したのです。

藤枝東高校の先輩Ｔ氏を通じて監督就任の要請を受けた菊さんは、早速中央防犯サッカー部の練習を見学。わずか 14 名の部員、しかも中学・高校、あるいは大学のいずれかでサッカーを経験した者は、そのうちわずかに 3 人。この部員達が夜勤勤務のガードマンをしながら、たとえ下位リーグの中西部 3 部とはいえ、優勝を果たしたその未知数部分に魅力を感じた菊さんは、「できれば、静岡県リーグ 1 部まで上げてくれ。」と言う富澤社長(以下当時の呼び名「富さん」と呼ばせて頂きます)に、「いや、その上の東海リーグまで持って行きます！」と、監督就任を受諾。菊さんと富さんはこの時、この中央防犯サッカー部を藤枝市で 1 番のチームに育て上げ、その上はこの藤枝市に譲渡、クラブチームとしてサッカーをリタイアした選手達を指導者として育てながら、少年達のサッカーを指導させていく、そんな夢をも約束していたのです。二人は既に日本のサッカーはもう企業チームの段階を越え、地域に根ざしたクラブチームを目指すべきとの考えを抱いていたのです。84 年春のことでした。

この菊さんの中央防犯サッカー部監督就任に驚いたのは、当のサッカー部員達で、自分たちのささやかな願いが、よもや元全日本代表で、しかもあの釜本邦茂参議院議員（執筆当時、元Ｇ大阪監督)、隆さんと共に、当時の日本サッカー界で大活躍された菊さんの監督就任の形で実現するとは、思いもよらなかったようですね。勿論、このニュースは当時の静岡新聞にも大きく取り上げられました。

監督を引き受けた菊さんは、その部員の殆どが夜勤勤務という状態の中、週 3 回の夜の練習に如何に来させるかという意識改革から始める始末。そして、サッカーは大好きながらも、その世界では殆ど無名なこの部員達を、”上手なプレーヤー”でなくして”いいプレーヤー”に育てるべく、１人１人とサッカーをトコトン語り合いながら、自分で考えるサッカーを徹底指導。そうした中、中央防犯サッカー部は 84 年、静岡県社会人サッカーリーグ中西

部 2 部を 8 勝 1 分 0 敗ではたまた優勝で飾り、翌 85 年、同中西部 1 部 9 勝全勝優勝、翌 86 年静岡県社会人サッカーリーグ 2 部 15 勝全勝優勝、そして遂に、翌 87 年には、監督就任の時に要請された静岡県社会人サッカーリーグ 1 部をも 12 勝 3 分 0 敗で優勝、監督自ら約束した「東海リーグ入り」を最短で達成し、併せて 4 年連続無敗記録をも達成してしまったのです。

こうして東海社会人サッカーリーグ入りを最短の 5 年で達成しましたことは勿論、選手達の日々のひたむきな練習の努力の賜物であり、さらには、菊さんのそうした選手達への、将来を見据えた”熱い”指導力によるものでもありました。殊、この年の 3 月、静岡学園高校を卒業し入部したＦW遠藤孝弘選手(当時 18 歳)や、日本リーグのフジタ（現湘南ベルマーレ）に 10 年間在籍し、6 月に加入したＭＦ後藤元昭選手(当時 33 歳)らの活躍は、チームをさらに上に向けさせたのはないでしょうか。88 年 2 月、東海リーグの入れ替え戦である、2 日間に渡る東海社会人サッカートーナメント大会では、中央防犯ＳＣはその力を遺憾なく発揮。2 試合で計 7 得点をたたき出し（うち 5 得点が遠藤選手)、しかも無失点に押さえた、完璧な昇格でした。

そこで、当初の目標であった「東海社会人サッカーリーグ入り」を果たした菊さんと富さんは、次なる目標を設定したのです。そう、勿論それは、夢の「日本リーグ入り」だったのです。しかしながら、そのためには僅かに 16 名の部員では長く、しかもレベルの高いリーグは戦い通すことは難しく、また、週に 3 日の練習では、技術向上はおろか、体力すら付かない。かといって、選手はみな、勿論仕事を持ち、しかも、殆どが当直はおろか、24 時間勤務もたびたびあるガードマンというアマチュアなのです。そこで、両氏は、初参入の東海社会人サッカーリーグ開幕前に、本格的な選手補強に取り組んだのです。結果、元読売－全日空（元横浜フリューゲルスー現横浜Ｆマリノス）所属のＭＦ・ジャイール選手（当時 28 歳、ブラジル出身、執筆当時京都サンガ通訳）と、日産（現横浜Ｆマリノス）所属のＦW・渡辺康之選手(当時 20 歳)の日本リーグ経験者 2 名を含む、10 名が新加入。さらには、この年のリーグ途中、ファイサル選手（元読売）や青木正英選手（元トヨタ)、アギナルド選手（ブラジル）を獲得し、菊さんは中央防犯ＳＣを「オープン攻撃を主体とする攻めのサッカーが身上」(静岡新聞）のチームに育てていったのです。勿論、彼らもみな、他の選手同様、中央防犯（あるいは関連会社）において仕事を持ちながら、リーグ戦を戦い抜いていったのです。

当時の菊さんを振り返り、「キクさんは、人間としてすばらしい人、そして、ものすごい人だと、今でも思っていますよ。」と、私に熱っぽく語ってくれましたジャイール正岡氏 (92 年日本人帰化)。氏曰く、前の年現役を引退し、当時は全日空と東京ガスのサッカースクールでサッカーをコーチしていたところ、ある方を通じて中央防犯ＳＣを紹介され、その年（88 年）の 3 月、中央防犯対ヤマハクラブ（東海リーグ所属）の練習試合に参加し、初めて中央防犯ＳＣの選手達と顔を合わせた時のことです。試合途中、捻挫してしまったジャイール氏を担ぎ、急いで車で監督の家まで連れて行って、湿布をしてくれた上に、丁寧にテー

ピングまでしてくれた菊さん。ブラジルでは、1 人の選手をこんなにまで心配してくれる監督はひとりとしておらず、そのことが強く印象に残り、その上、ヤマハ発動機（現ジュビロ磐田）の 2 軍であるヤマハクラブに、3：1 で勝った中央防犯ＳＣに、当時関東リーグだった全日空を日本リーグ 2 部に押し上げた氏の血が騒いだのか、ジャイール氏は早速、中央防犯ＳＣ入りを決意したとのことでした。　ジャイール氏も曰く、一つ一つのプレーを選手とお互いに納得するまで話し合いながら指導し、監督には不向きなほど人情に厚く、人間味のある監督ゆえに、選手全員が苦しいリーグ戦も戦って来れたのでしょうか。初参入の東海社会人サッカーリーグも第 12 節には、10 勝 1 敗 1 分けで遂に首位に立ってまったのです。そして、その最終節、この試合で勝つか引き分けるかで優勝が決まる対西濃運輸（現在廃部）戦で、中央防犯ＳＣは前半 25 分、西濃運輸にあっさりと先制されるも、5 分後、ジャイールのＦＫで追いつく。が、前半 42 分にはクリアーしたボールが突っ込んで来た西濃選手に腹部に当たり、勝ち越し点を与えてしまったのです。さらに、後半開始早々、青木選手がこの試合 2 度目の警告を受け、退場。「普通なら途中であきらめている試合」に、「選手は精神的に粘っこさがついてきた」（菊さん言）のか、中央防犯ＳＣはこれにも動ぜず、チャンスをじっと待ったのです。そして、後半 32 分、ドリブルで西濃ゴール前に詰めたアギナルド選手が、西濃ＤＦに押されて転倒。同選手がこのＰＫを落ち着いて決め、待望の同点に追いついたのでした。そして、これまた創部 6 年目にして最短で、中央防犯ＳＣは東海社会人サッカーリーグをも制覇してしまったのです。菊さんも驚くほどの勢いでした。

これまで「挫折を知らなかった」（日刊スポーツ）中央防犯ＳＣは、翌 89 年 3 月、夢の日本リーグ入りを目指して、地元藤枝市民グランドで行われた全国地域リーグ決勝大会予選リーグで、1 勝 1 分け。得失点差で僅かに及ばず、決勝リーグ進出ならず。この年の東海社会人サッカーリーグも、9 勝 2 分 1 敗で準優勝に終わり、中央防犯ＳＣにとって初めての”足踏み”となったのです。しかし、毎年何らかのタイトルと勝ち取っていた中央防犯ＳＣは、この年に行われた第 25 回全国社会人サッカー選手権大会では、見事に初出場、初優勝を成し遂げ、菊さんをして「このチームは日本一仕事が過酷なアマ。それを乗り切って勝ったんだ。すばらしい。」（静岡新聞）と言わしめたのです。

この 2 年間で新加入選手は、ＤＦジアス選手（元ヤンマー、ブラジル）とＦＷ川上選手（元清水エスパルス・執筆当時Ｌリーグ鈴与清水コーチ、アルゼンチン育ち）くらいで、レギュラーの平均年齢は 29 歳に近くになった中央防犯ＳＣは、翌 90 年は、東海社会人サッカーリーグを 9 勝 2 分 5 敗で準優勝で終わるも、2 度目の日本リーグ入りを目指す全国地域リーグ決勝大会への出場権を得、第 26 回全国社会人サッカー選手権大会では、史上初の 2 年連続優勝を成し遂げたのです。創部以来はじめての精彩を欠いたリーグ戦を振り返り、確かに衰えたチーム力を経験でカバーし、「2 度目の正直」（日刊スポーツ）にチャレンジする中央防犯ＳＣを率いる菊川監督は、翌 91 年 1 月、創部以来初めて 6 日間の合宿を行い、選手達に悲願の日本リーグ入りに賭ける意気込みを示し、選手達の執念をも引き出そうとしたのでした。

実は、菊さんや選手達以上に熱く、そして強い思いで、日本リーグ入りへの「2度目の正直」に賭けた男がいたのです。そう、それは勿論のこと、富さんこと、富澤中央防犯社長だったのです。氏は、選手の殆どが「24時間(休憩4h)勤務→当直(17:30〜8:30)→当直→休日」という勤務体系の中、史上初の全国社会人サッカー選手権大会連続優勝を成し遂げ、2度目の日本リーグ入りを目指す全国地域リーグ決勝大会の出場権を得た選手達に、”菊川氏の監督就任”に続いての”ビッグなプレゼント”を心密かに準備していたのです。すなわち、富さんは、選手達が社長自ら菊さんに示した「静岡県リーグ1部優勝」を果たしてくれた87年の暮れのこと、専用練習施設もなく、藤枝東高校など近くの中学・高校のグランドを借りながら夜間練習をしてきた選手達のために、なんとサッカー専用グランドの建設を計画したのです。そして、翌88年には藤枝市宮原の調整区域に土地を取得し、開発許可を得て、89年春から造成・建設工事に着手。遂に、90年8月に、総面積約二万平方メートル、メイン、サブコート各1面、スタンド、夜間照明、散水器、放送、駐車場も完備した「中央防犯ＳＣ宮原グランド」が完成したのです。選手は勿論、この”ビッグなプレゼント”には大変な喜びで、菊さんの監督就任に続く”2つ目の驚き”でもありました。選手達はこの日、自分たちで勝ち得たグランドに立ち、菊さんと共に、「次は日本リーグ入りをして、ローン（芝）コートにしたい。」（スポニチ紙）と誓ったのです。

そうして挑んだ91年3月1日、全国地域リーグ決勝大会予選リーグ初日、対ＮＴＴ四国戦。「前半24分の大塚覚選手(当時30歳)のシュートで先制したが、後半開始早々、ＤＦ陣の一瞬のすきを突かれ追いつかれ」（日刊スポーツ紙)、「中央防犯ＳＣは終始押し気味に進めたが、決定打を欠き」（同紙)、1対1の引き分け。しかし、翌2日目は、この引き分けに選手達が奮起し、遠藤選手2ゴールの活躍。3対1で京都府警を下し、ようやく決勝リーグ進出を果たしたのです。そして、同月15日、愛知・刈谷港町グランドで始まった、4チーム総当たり戦の同大会決勝リーグ。初日、中央防犯ＳＣは強風にも悩まされ、またしても緊張感からか決定打を欠き、大体大蹴球団に0対0の引き分け。大事な初戦でながら、4チーム中最も組みやすいと見られていた相手だけに、この引き分けは敗戦に等しかったのです。そして、翌2日目、「奇跡だ。雨に沈んでいた中央防犯ベンチが、起死回生の一発に沸き返った」と日刊スポーツ紙を驚かせた、対東京ガス戦。前日はなんと4チームとも0対0の引き分けで、日本リーグ昇格のためには、この日は絶対負ける訳にはいかない中央防犯ＳＣは、前半「怒涛の攻撃を見せる」（同紙）も最後に決めきれず、共に無得点。「風下に回った後半は劣勢に立たされ」（同紙）た中央防犯ＳＣは、「再三のピンチを乗り切ったが、32分についに先制ゴールを許し」（同紙）てしまったのです。そして、点取り屋のアギナウド選手が左足捻挫でリタイアした上、ベテラン後藤選手も後半早々、持病の左足太股肉離れが再発し、戦線離脱。さらには、先制された直後、ＦＷ川上選手がゴール前の競り合いから額をバッティングし、包帯を巻きながら突破を試みる状態に。「後藤が抜けた時に不安が走ったが、あの状態でよくあそこまで持ったよ。」（同紙）と、菊さんも脱帽。そう、そんな極限の中、「後半39分、右45度からジャイール選手のＦＫがゴール前の混戦から左に流れたところを、

大塚選手がキープ。ゴールラインぎりぎりまでドリブルで持ち込んでフワリと浮かすと」、「ベテラン青木正英選手(当時 31=大分工出)が奇跡的なヘディングシュートを決めて、1 対 1 に追いつ」（共に同紙）き、連日の引き分けでまさに首の皮 1 枚で、最終・西濃運輸戦に待望の日本リーグ入りの望みを繋いだのです。

そして、その最終日、前の試合で東京ガス（現ＦＣ東京）が 3 対 2 で大体大蹴球団を下し、勝ち点 4 で先に日本リーグ入りを決め、2 分け勝ち点 2 の中央防犯ＳＣは、1 勝 1 分け勝ち点 3 の西濃運輸に勝たなければ、悲願の日本リーグ 2 部に昇格できないという状況に追い込まれたのです。ところが、前日の試合で肉離れを起こしたＭＦ後藤選手はこの試合も出場できず、司令塔・ジャイール選手は警告が重なり出場停止。加えて、前日の殊勲者青木選手と川上、石上（執筆当時中央防犯ＡＣＭ藤枝ＦＣ監督）両選手が、風邪による高熱を注射で押さえての出場という状況に、アギナウド選手も捻挫の足をテーピングで固定して出場するという、まさに満身創痍。しかも、これまで引き分けこそあれ、勝ったことのなかった西濃運輸に、前半 4 分、ベテランＭＦ大塚選手がトラの子の点を叩き出したのです。「『西濃はヘディングがあまり強くない。風が強いので、バックの裏に上げれば決められる。』そんな信念を、ＤＦ・佐々が左サイドから絶妙なロビンングで好アシスト。（それを大塚選手が）ペナルティエリア右隅から、ノートラップでゴール右隅に決めた」（日刊スポーツ紙）のです。「勝つしかない、それだけを考えてやった。後半は本当に長かった。」（同紙）という、まさに主将・若林選手の言葉通り、後半風下に立った中央防犯ＳＣは、「ジアスが、石上が、若林が、佐々が、そして、ＦＷ遠藤や青木までが死力を振り絞ってバックラインを支え」（同紙）、西濃運輸の攻撃をよく防ぎ切り、タイムアップの笛に、イレブン全員が涙を流して歓喜を爆発させたのです。「ありがとう。みんな、本当によくやってくれた。ただただ、ありがとう、と言いたい・・・」と、声を上げて男泣きした 6 年目の菊さん。そして、創部 10 年目の快挙に、「今日から一週間、みんな、何を食べても、いくら飲んでも、全て勘定はこの私が払う。」とまで選手達を讃えた富さん。共に涙にむせびながら、抱き合い、選手達と共に、悲願達成を喜び合うその姿に、応援に駆けつけた私達もつい貰い涙したものです。

さて、そうして勝ち取った 91 年第 20 回日本リーグ 2 部開幕を前に、中央防犯ＳＣは、清水ＦＣ（現清水エスパルス）入りした川上選手と、ブラジルに帰国したアギナウド選手に代わり、李選手（韓国）や石川（前全日空、元中央防犯ＡＣＭ藤枝ＦＣ）、津野（前本田、元福岡ブルックスー元中央防犯ＡＣＭ藤枝ＦＣ）各選手らを獲得し、迎えた開幕戦の対甲府クラブ（執筆当時Ｊ２ヴァンフォーレ甲府）戦。先制点を許すも後半盛り返し、遠藤選手の連続 2 得点などで 3 対 1 と逆転、初戦、初勝利を納めるかと思われたのですが、残り 5 分で 2 点を許し、惜しくも引き分けに終わったのです。この試合、数年前からチームのマネージャーを手伝っていた”小菊ちゃん”こと、菊さんの息子さんと菊さんが 3 対 2 と追い込まれてきたチーム状態に興奮し、ベンチでなんと”親子喧嘩”を始め、後藤コーチに制せられる場面もあったのです。しかし、初参入の日本リーグ 2 部も、第 3 節の対田辺製薬戦で 2 対 1 で初白星を挙げ、第 5 節対京都紫光クラブ（現京都パープルサンガ）戦で 4 対 1 と勝利し、

第８節（焼津市陸上競技場）には中央防犯ＳＣは、あのジーコ選手が加入した住友金属（現鹿島アントラーズ）に、ジャイール選手のＰＫで先制し、六千もの観衆を湧かせたものの、ジーコ選手のヘッドシュートなどで１対３と逆転され、結果、7 勝 6 分 17 敗で 16 チーム中 12 位の成績で終わったのです。

Ｊリーグ誕生で改組された翌 92 年第１回ＪＦＬ2 部（Ｊ２）に向け、中央防犯ＳＣはこれまでチームを引っ張ってきたＭＦジャイール選手の京都紫光クラブ移籍で、全日空からピッコリ（元アビスパ福岡監督)、ホルヘ、森重各選手を獲得。さらに、李選手に代わり韓国から朴選手を得、菊さんと富さんは、大満足のこの戦力補強と前年のチームの戦績分析に、密かに記念のＪ2 初代チャンピオンを目論んだのです。そのため、菊さんはこのリーグ優勝の目標を選手達にはっきりと示すためにも、試合中、特に緩慢なプレーには厳しく指導。常に勝利に拘った指揮を執ったのです。それが時に、ＤＦ石上選手と試合中に、動きのことでけんか腰に言い合ったり。また、ある試合では勢い、ＰＫを取られた主審の判定に執拗に抗議し、退場を宣告され、その上試合後、公式記録に署名を求められた際、あのＰＫは認めない旨の一言を書き、署名。更に、帰ろうとしてタクシーを待っている間に、同じくタクシーに乗りに来たその主審に、再び抗議し、この ３ の件がその後のＪ１運営委員会で取り上げられ、各２試合計６試合の監督のベンチ入り禁止処分を受ける程の、”悪しき”熱血漢振りを示したのです。また、ある時は、試合中、自らの中央防犯ＳＣの選手に危険なバックチャージを掛け、警告を受けた相手選手に向かって、「てめえー、うちの子に何をするんだ！」と怒り、たまたま手にしていた小指の頭ほどの小石をほうり投げたところ、なんとそれがその選手の体に当たり、これまた退場処分。「いやはや、これらばかりは監督失格ものでしたよ。」と反省する菊さん。しかし、「監督自ら真剣勝負を挑めば、自ずと選手達も・・・」と言う菊さんの気持ちが選手達に伝わったのか、中央防犯ＳＣは開幕戦は落としたものの、第２節から３連勝をするなど、前年とはうって変わって快進撃を続け、遂に第 11 節には京都紫光クラブを４対２で破り首位に立ち、第 17 節今季最後のホーム試合・対コスモ石油（元ＪＦＬコスモ四日市、廃部）戦で４対１で勝利し、首位を守り続け、最終節対西濃運輸戦（各務原市スポーツ広場）を４対０と快勝し、12 勝２分け４敗、勝ち点僅か１差で京都紫光クラブを押さえて、優勝。記念すべきＪ２初代チャンピオンの座に就いたのです。

この年、初Ｊ2 の得点王にピッコリ選手・18 得点、その第 2 位に遠藤選手・16 得点、リーグのアシスト王に、ジャイール選手を上回るテクニシャン・ホルヘ選手になり、遠藤、ピッコリ、ホルヘ、若林（主将）各両選手は、Ｊ2 ベストイレブンにも選ばれたのです。

遂にＪ１。トップの日本リーグに入ったと思いきや、Ｊ誕生でまた一歩増えた階段も、あと一つ。小さい頃から、父親に捨てられた悔しさとその父親に会いたいささやか願いから心静かに Ｊ を目指してきた遠藤選手にとって、日本のいずこからでも分かる舞台に自分が立つのも、もうその向こうだ、」と。ここまでともに戦って来たチームメイトそれぞれが、それぞれの思いでここやってきたように、彼は多分、そう考えていたにちがいないと思います。それが彼、遠藤選手をして、ここまで突き進ませてきたものではなかったかと、私は思って

おります。

記念すべき初代Ｊ2 チャンピオンに輝いたＡＣＭ藤枝ＳＣは、その勢いでその年 11 月、第 72 回天皇杯全日本サッカー選手権大会東海予選で、１回戦東海リーグのジャトコを 4 対 2、2 回戦Ｊ2 のコスモ石油を 2 対 1 で下し、2 回目の本大会出場を決めたのです。

その本大会第 1 回戦（92 年 12 月 5 日）は、Ｊ１所属の東芝（現コンサドーレ札幌）と対戦、互いに点を取り合う壮絶な試合となりました。先制したのは、ＡＣＭ藤枝ＳＣ。前半 8 分、右サイドにドリブルで持ち込んだ静岡学園高校の先輩・久保山選手が中央に折り返し、それをピッコリ選手が背後から走り込んできた遠藤選手にスルー。東芝ＤＦがピッコリ選手に引かれ、ノーマークとなった遠藤選手はこれを右足で決め、1 対 0。その 1 分後、今度はその久保山選手が右ペナルティエリア付近から豪快に蹴り込み、2 対 0。その後同 14 分に東芝に返されたが、同 37 分、今度はピッコ選手のアシストを受け、遠藤選手が自らの 2 点目を決め、3 対 1。しかし、同 42 分に東芝・バラン選手に決められ、3 対 2 で前半を折り返したのです。そして、後半 9 分、再び久保山選手が、今度は右サイド浅い位置から正面の遠藤選手にパス。遠藤選手はこれを受け、体を反転させながら東芝ＤＦを交わし、今度は左足で蹴り込み、ハットトリックを達成。ところが、ここは 1 人の退場者を出しながらもＪ1 の意地を見せた東芝。同 18 分、39 分と、東芝・バラン選手もハットトリックを決め、4 対 4、延長に持ち込まれたのです。延長前半は互いに得点を挙げられず、後半 3 分、遂に東芝に逆転され、4 対 5、万事休す。しかし、ここから脅威的な粘りを見せたＡＣＭ藤枝ＳＣ。同 8 分、石上選手のスルーパスに反応したホルヘ選手が決め追いつき、ロスタイムに入った直後、再び久保山選手が右サイドから折り返したボールに、遠藤選手は東芝ＤＦともつれ合いながら、スライディングシュート。「なんとしても 2 回戦で清水エスパルスと対戦したかった」と言う遠藤選手の会心の 4 得点目で、劇的な勝ちを収めたのです。

そして、迎えた翌 12 月 6 日第 2 回戦、対清水エスパルス戦。オレンジ一色の大応援団に埋め尽くされたスタンドの中、僅かに 50 数名、青色の小旗を振る応援団に見守られたＡＣＭ藤枝ＳＣは、後半 23 分に三浦泰年選手に頭で決められ、0 対 3。静岡学園高校先輩・三浦選手のマークを受け、プロの強さを存分に見せつけられた遠藤選手は、その 6 分後、プロチームを相手に強烈にその力をアピールしたのです。ドリブルで右から持ち込んだ遠藤選手は、右ペナルティエリア外で清水ＤＦ・平岡選手のスライディングタックルに右足を蹴られ、フリーキックを得たのです。そして、ホルヘ選手の上げたそのフリーキックに遠藤選手は、ピッコリ選手の陰から相手ＤＦの間げきをぬって綺麗に頭で合わせ、遂にプロに一矢を放ったのです。「プロとは体力と筋力が違い、当てられてどれだけ自分が踏ん張れるかが課題」（報知新聞）と、先輩・三浦選手のマークから学んだと言う遠藤選手。三浦選手から、「バネがあり、シュート感覚も鋭い。もっと上を目指せる選手。プロで戦ってみたいね。」（同紙）と声を掛けられ、「もし誘いがあれば考えたいと思う。」（同紙）と漏らした遠藤選手。華やかなＪリーグの開幕に、やはり彼、遠藤選手もプロに憧れ始めていたのです。試合はその後、清水・ミランジーニャ選手にハットトリックを決められ、1 対 4 で敗退。しかし、こ

の試合で、「今までこんなに厳しいプレッシャーを受けたことはなかったと思う。これは体験して、初めて理解できるもので、どこが足りなかったか、補うにはどうしたらよいか分かったはず。」（静岡新聞）と菊さんがおっしゃったように、遠藤選手も、そして、他のイレブンも、大変大きなものを学び取ったのです。

そして、遂に 93 年、ＡＣＭ藤枝ＳＣは、愛称として「藤枝ブルックス」を名乗り、元韓国代表ＤＦ・曹(ﾁｮｳ)敏国選手らを獲得し、Ｊ準会員のベルマーレ平塚（現湘南ベルマーレ）、ジュビロ磐田、柏レイソルがＪリーグ目指すＪリーグ直下のＪＦＬ1 部（Ｊ１）に、いよいよ初参入したのです。しかしながら、藤枝市民の反応は相変わらず鈍く、観客も以前よりは増えたものの、とてもＪリーグには何百分の一にも及ばない状態でした。しかも、やはりＪ1 の壁は厚く、藤枝ブルックスも開幕 3 連敗を喫してしまったのです。そして、迎えた柏レイソル戦の焼津市営陸上競技場。なんと、ピッコリ（元アビスパ福岡監督）のＰＫ・Ｖゴールで快勝、地元・藤枝は沸き上がりました。

そして、8 月 8 日第 12 節では満員の藤枝市民グランドで、前対戦の第 5 節で 0 対 8 の屈辱の試合を強いられたジュビロ磐田を、後半 39 分のピッコリ選手の決勝点で下し、5 勝目を挙げたのです。結果、藤枝ブルックスは初Ｊ1(JFL)を 6 勝 12 敗、10 チーム中 9 位の成績で終えました。前述の天皇杯本大会での活躍で、一部マスコミにＪリーグチームへの移籍かと話題に上り、冷静に対応していたものの、その憧れに揺れ動いた遠藤選手は、第 8 節対東京ガス戦でＪ1 初得点を挙げ、古傷の腰痛による 1 試合欠場を除いて、17 試合フル出場し、7 得点の活躍を残したのでした。

この年、Ｊ2 第 2 位のジュビロ磐田が、静岡県内 2 チーム目としてＪリーグ昇格を確実にし、益々高まる人気のＪリーグに、9 位ながら前述のように、柏レイソル、ジュビロ磐田らの大物喰いを発揮した藤枝ブルックスに、当然のように周囲から、その昔サッカーの街として全国にその名を轟かせた藤枝からのＪリーグチーム誕生の夢を託され、リーグ半ば頃より、富さんこと、藤枝ブルックス代表の苦悩が始まったのです。遠藤選手にしても然り。サッカーをする者、みんなが憧れるように、彼もリーグ終了後、Ｊリーグチームから正式に移籍の誘いがありまして、やはり自分をＪリーグで試してみたいという想いが益々高まり、まずはこれまで自分を育ててくれた菊さんと富さんに相談したのです。「これは、最初で最後のチャンスかもしれない。藤枝ブルックスがこの僕とプロ契約をしてくれるならば、勿論、藤枝ブルックスに残留する。しかし、社員契約ならば、誘いを受けたＪリーグチームで自分を試すわがままを聞いてもらいたい。」これまでのご恩に揺れ動き悩みながらも、やはりそこは自分の人生、そんな結論を得た遠藤選手でした。

その年 93 年 10 月、富さんは遂に藤枝ブルックスのプロ化を決意し、94 年 1 月には、オルギンをヘッドコーチに迎え、トログリオ、マジョール、富島、竹元、礒田、其田、宮村、梅山、古邊、佐野各選手らとプロ契約を結び、Ｊリーグ入りを明確に打ち出したのです。当然、遠藤選手、藤枝ブルックス双方もこのプロ契約を結ぶことに同意し、遂に自分を育ててくれた菊さんと富さんのもと、しかも自分が生まれ育ったこの藤枝の地でＪリーグを目指

すことになったのです。

しかしながら、この年、Ｊ準会員の柏レイソルを 4 対 3 で競り勝った 5 月 22 日、この間水面下で進められてきたＪ規定のホームグランドの早期着工交渉が決裂、福岡県民 50 万余名の署名に大きく動かされ、富さんは苦渋の想いで藤枝ブルックスの福岡移転を決意したのです。この時の富さんの苦悩の詳細は、3 日間に渡って富さんにお話を聴かせて頂き、B4 ペラに書かせて頂き、後援会の支援で藤枝市内全戸に新聞折り込みさせて頂きました。選手達も富さんの決断に、その年の第 3 回ＪＦＬ（Ｊ1）でＪ準会員のセレッソ大阪、柏レイソルに続く第 3 位の成績を修め、その意を強く示したのです。この選手達の底力を見たオルギンは、翌年監督に就任し、1 年でＪ昇格を果たすため、菊さん（当時総監督）が思わず制す程の、まさに血反吐を吐く練習を選手達に強いり、「リーグ１番の練習に耐えてきたからには、それ以下の練習をしてきた相手には絶対に負けられない」との強い精神を選手に植え付け、その 95 年ＪＦＬ1 部（Ｊ1）を 24 勝 6 敗（得失点差＋58 点）で見事に優勝を果たし、Ｊ昇格を果たしたのです。菊さん、富さん両氏が、到達の度に次なる目標を掲げ追いかけてきた夢が、遂に実現したのです。

(1995 年 5 月執筆、2000 年 2 月・2002 月 10 月 3 日・2009 年 4 月 21 日・2025 年 3 月 14,15,16 日一部修正・加筆)